

この本、いかがですか？

ナイチンゲール伝 図説 看護覚え書とともに



茨木 保 著
定価 1800 円＋税
A5／医学書院／2014 年

評者

福澤(岸)利江子 東京大学大学院医学系研究科
家族看護学教室 助教

マンガでナイチンゲールを学びなおす

助産師(産婆)は英語で midwife です。日本の助産師は戦後に看護師免許をもつことが義務づけられたため、正確には nurse-midwife(看護助産師)といいます。現在、世界の助産師をみわたすと、看護師免許を必要としないダイレクトエントリーの助産師が多いことに気づきます。むしろ、そちらのほうが主流だと感じるほどです。興味深いことに、看護の祖ともいえるフローレンス・ナイチンゲールを生み出したイギリスで、助産師は看護師免許を必要としません。しかし、実はナイチンゲールは当時、助産師学校創設にもかかわっていたのです。

本書を読むと、看護と助産に共通する考え方に何度も出会います。すなわち、自然が働きかけやすい最高の状態に患者を置くことの大切さ、患者に負担をかけない方法で十分に観察することからケアが始まること、など。さらには、自分がいない時にも同じケアが提供されるようなくみをつくる責任をもつということである、医師に

対する従順さは知的であるべき、と看護師の態度について論じます。ナイチンゲールは、他人の健康の世話をするすべての人が看護師であるといいます。彼女が神の声にしたがい看護の仕事に邁進したことも、妊娠・出産の真理を追究する助産師がどこか神がかってくることに似ているのではないのでしょうか。

現代の私たちは、看護師・助産師はあたたかい人柄と社会性を備えていなければ、臨床経験は最低〇年以上、もっと資格をとって、進学して……、など、さまざまな「できる看護師・助産師の条件」を信じ、プロとしての自分に自信をもちにくくなっている気がします。しかし本書を読むと、それらの条件からかけ離れていたナイチンゲールが、これほどの偉業を成しとげたことに驚きます。

本書は、あるがままの看護・助産の姿を見直す機会を与えてくれます。自分をよい看護師・助産師にするのが外づけの条件ではないとしたら何なのだろう？と考えさせてくれます。

看護師であれば誰もが知っているナイチンゲールですが、その著作は学生の頃に読んだだけで長く遠ざかっていたという方は私だけではないと思います。社会人になってから読み返すと、学生の頃には読み流していたことがたくさん心に響きました。助産師が看護師免許をもつことは強みだと嬉しく思いました。医療の進歩に伴い、助産だけでなく、看護も「看護^{みまも}る」という本質的な役割がみえにくくなっている現代、ナイチンゲールの言葉に立ち返ることは、看護職としてぶれずに働き続けるためにも、看護職以外の人々へ看護について説明し理解を得るためにも、とても有意義だと思います。

本書はマンガなので、仕事で疲れている時でも、わかりやすくユーモアのある絵のおかげで、すんなり頭に入ってくれます。今やマンガは日本が誇る文化ですので、本書が翻訳されることを願っています。仕事で海外を訪れる際に、前作の『まんが 医学の歴史』とあわせてお土産にできれば、海外の仲間に絶対に喜ばれると思います。①